

若者のテレビ視聴行動の類型化 —筑波大学生のテレビ視聴行動をもとに—

古賀 竣也

テレビは1953年の放送開始以来、全国に普及し新聞やラジオよりも圧倒的なメディアとして受容されてきた。さらに2011年にはテレビ放送がアナログ放送から地上デジタル放送へと移行し、テレビはより高画質で豊富な情報を提供するようになった。しかし近年、人々はテレビを見なくなったと言われている。実際にNHK放送文化研究所の調査からも2010年から2015年にかけてテレビ視聴時間が減少していることが明らかになっている。特に「若者のテレビ離れ」という言葉と共に、現代の若者はテレビを見なくなった、視聴習慣を持たなくなったと言われている。ところでこうした調査や研究における「テレビ視聴」とは、通常テレビ番組を自宅のテレビ受信機で視聴する行動のことを指すがテレビ番組を視聴する方法はテレビ受信機だけではない。無料見逃し配信サイトTVerやインターネットテレビ局AbemaTV等のサービスの開始、YouTube等の動画共有サイトの普及により、テレビ番組はパソコンやスマートフォンでオンデマンド視聴することができる。こうした状況を踏まえると、「テレビ視聴」とは「テレビ番組を受信機だけでなくパソコンやスマートフォンでも視聴すること」を指しているのではないかと考えられる。テレビ視聴をこのように考える場合、実際に若者はテレビを「受信機」で視聴していないだけで「オンデマンド」ではある程度視聴しているのではないかと予想される。

そこで本稿では、テレビを見なくなったと言われている若者を対象にして、現在のオンデマンド視聴が普及した環境を考慮した上で、テレビについての意識や行動の実態を明らかにすることを目的に調査を実施した。調査対象者は筑波大学生157名である。調査項目は、テレビ視聴時間、視聴ジャンルを尋ねるものに加えて、河田ら(2012)が用いたテレビ視聴行動調査の手法を援用したテレビ視聴に対する意識を問う27問である。

結果として、平日はリアルタイムでは約4割、録画では約2割、オンデマンドでは約2割の人が1日平均1時間以上テレビ番組を視聴しており、休日もリアルタイムでは約5割、録画では約3割、オンデマンドでは約4割の人が1日平均1時間以上テレビ番組を視聴していた。テレビ視聴に対する意識を基に行ったクラスタ分析では、「テレビ高関与群」「テレビ高視聴群」といったテレビをよく視聴するグループ、好きな番組だけ視聴する「限定的視聴群」、ただ何となく視聴する「漠然視聴群」、テレビに関心がない「テレビ不必要群」という5つのグループが導出された。「テレビ高関与群」「テレビ高視聴群」「漠然視聴群」の3つのクラスタにはテレビ視聴の習慣を持つ人々が集まっていること、「テレビ不必要群」というクラスタに分類される人でも、オンデマンド視聴はしていたりすること、などから、今回、調査の回答者が以前に比べてテレビを見ていないという結果は出なかった。ただし、漠然視聴群というクラスタが出現したことから、テレビを何となくつけている、という習慣は以前よりも強くなっていると思われる。

(指導教員 松林麻実子)